

論文の内容の要旨

論文題目 人はディスコースの「支配性」にどのように対処するのか—臨床心理学におけるポジショニング理論の応用に向けて—

氏名 綾 城 初 穂

本研究は、日本人キリスト教徒へのインタビューおよび臨床心理学的援助を利用したクライアントの事例から、ディスコースの「支配性」に人がどのように対処できるのかを検討し、臨床心理学的援助に資する知見を得ることを目的としたものである。

■ 第1部 問題

ディスコースとは、物事の解釈の望ましい方向を作り出すような社会的に共有される一連の準拠である。人は自らを記述・説明する際に複数のディスコースを参照することができるが、そうした複数のディスコースは平等に参照されるわけではなく、社会で多くの人が第一義的に考えるステレオタイプ的なディスコースが自らの説明や記述において支配的になる場合も多い。この支配的ディスコースが否定的な場合、人はそれによって否定的なアイデンティティを構築されてしまうなど否定的な影響を受ける可能性がある。臨床心理学的援助を利用するクライアント（以下、CI）はしばしばこうしたディスコースの「支配性」による否定的影響を受けている。そこで本研究ではCIがディスコースの「支配性」にどのように対処できるのかということをリサーチクエスチョンとした。

リサーチクエスチョンを検討するためディスコース分析による臨床心理学研究が概観され、ミクロ的な視点を重視するディスコース心理学と、マクロ的な視点を重視する批判的ディスコース分析の乖離があることが指摘された。そして、この問題点を補う方法としてポジショニング理論

による分析が提案された。ポジショニング理論とは、ディスコース上の主体の位置を理論化したものであり、語りのストーリーラインと発話行為からポジション（主体）を捉えるポジショニング・トライアングルが核となっている。ポジショニング理論を用いた心理学研究を概観したところ、ディスコース上のポジションの変化や否定的アイデンティティへの抵抗としてのポジショニングにあまり焦点が当てられていないことが指摘された。そこで本研究のリサーチクエスションを検討する上で、「否定的アイデンティティを構築するような支配的ディスコースと日常的に接する人々は、それにどのようにポジショニングしているのか」という目的（目的1）と、「支配的ディスコースへのどのようなポジショニングがCIにとって『問題』となるのか」という目的（目的2）とが設定された。

■ 第2部 否定的な支配的ディスコースを持つ「宗教」という言葉に関するポジショニングの検討

第2部では目的1を検討するために、否定的なディスコースが支配的であり、同時に自らの信仰をも意味する「宗教」という言葉を、日本社会の宗教信者がどのように語るのかということについて検討した。

研究1では、日本人キリスト教徒14名をインフォーマントとして、信仰や社会との関わりについてのインタビューの際に「宗教」という言葉をどのように用いているのかを、ストーリーラインとポジションの関係から分析した。その結果、「宗教」語りに関して3つのポジション（キリスト教徒ポジション・宗教信者一般ポジション・日本社会に生きる者ポジション）が見出された。これらは「宗教」という言葉に関してそれぞれに対立するようなポジションであったが、インフォーマントの多くはその矛盾・対立する複数のポジションを同じ語りの中で用いて、異なるディスコース上へとポジショニングをシフトさせていた。

研究2では、同様の語りを発話行為の視点から分析した。その結果、彼らがポジション間の矛盾・対立に対処する際に、モラルポジショニング（キリスト教徒という役割からのポジショニング）と個人的ポジショニング（個人的属性からのポジショニング）の2つの在り方をとっていることが見出された。そして、このうち個人的ポジショニングが、「宗教」という言葉に付随する日本社会の規範（モラルオーダー）を逸脱することを正当化し、ディスコースの「支配性」を緩める機能を持っている可能性が指摘された。

これらの結果は、日本人キリスト教徒が「宗教」に伴う日本社会の否定的な支配的ディスコースに対して、ポジションをシフトしたり（研究1）、「個人」へとポジショニングしたり（研究2）することで対処していることを示している。彼らは、「宗教」に付随する支配的ディスコースを否定することはせず、しかしながらそれに完全に位置付くこともしないという形で、言わば動的に自己を正当化しながら「宗教」という言葉を語っていた。こうした「動的な折り合い」は、日本人キリスト教徒がキリスト教徒であると同時に日本社会にも生きており、それゆえ彼らにとってどちらも否定できない「現実」であることを考えると適応的な対処であると言える。

■ 第3部 CIの語りにおける支配的ディスコース上のポジショニングの検討

第3部では目的2を検討するため、臨床心理学的援助を利用したCIの事例をポジショニング・トライアングルから分析する二つの研究を行った。

研究3では、筆者が担当した30代男性のCIの音声記録および筆記記録（受理面接と第1回面接）を対象として、「問題」（主訴や悩み）がどのように語られているかを分析した。その結果、「問題」の語りは認知やパーソナリティといった個人内部の問題の反映としてではなく、支配的ディスコースとの関連の中で理解できることが示された。また、援助者（カウンセラー）の発話がCIを苦しめる支配的ディスコースを再生産し、援助の妨げとなっていた可能性も指摘された。このことからCIの語りは、支配的ディスコースによる否定的なポジショニングに対するCI側の抵抗として、すなわちCIとディスコースの間の「せめぎ合い」として捉え直せることが示唆された。

研究4では、臨床心理学的援助を経て支配的ディスコース上のCIのポジショニングにどのような変化が生じるのかを、子どものひきこもり相談を「問題」として来室したCIの事例から検討した。その結果、支援機関利用の促進とCIのポジションの変化に関連があることが示唆された。この変化のきっかけとしてCIが語ったある出来事に焦点が当てられ、子どもが支配的ディスコースによって受動的にポジショニングされる存在から、子ども自らが支配的ディスコースを参照して能動的にポジショニングすることもできる存在へと移行したことが、CIに対する支配的ディスコースの否定的影響を軽減したということが示された。

第3部のCIの語りでも第2部と同様に、支配的ディスコース以外のポジションのシフトや支配的ディスコースの抵抗としての個人的ポジショニングは確認されたが、それらがディスコースの「支配性」を軽減することはなかった。一方で研究4からは、支配的ディスコースを反映する言葉を用いて自らポジショニングすること（能動的ポジショニング）がディスコースの「支配性」を軽減することも示唆された。このことから、「支配的ディスコースへのどのようなポジショニングがCIにとって『問題』となるのか」という問い（目的2）に対しては、支配的ディスコースに受動的にのみポジショニングされ、折り合えるようなポジショニングができないことがCIにとって「問題」となる可能性があるかと答えることができる。

■ 第4部 総括

以上の結果から、ディスコースの「支配性」へ対処できるためには、ポジショニングの流動性を限定的なものとする支配的ディスコースに対して能動的なポジショニングの可能性をCIが得ることが重要であることが示唆された。これは単なる主体性の獲得や、受動性から能動性への移行ではなく、受動的にのみ固定化されない流動性を持ったポジショニングを獲得したということである。そのためディスコースの「支配性」に対処できるためには、受動的であることと能動的であることを、主体的であることと客体的であるということ、それらの両極をどちらも可能性として含むポジショニングができることが重要であると考えられる。

本研究の臨床心理学的意義 ディスコース分析による臨床心理学研究では、支配的ディスコースからのシフトを重視する一方で、支配的ディスコース上でのポジションの変化についてはあまり着目してこなかった。この点で本研究の知見は支配的ディスコース上での流動的なポジショニングの獲得という方向性を明確にしたという意義がある。また、これまでの臨床心理学的援助の多くでは、認知といった個人内部の「問題」解決に着目してきたが、こうした視座はCI個人に問題の責任を過度に帰属する可能性や、援助者側の反省的实践を妨げる可能性、そして対人交流によって援助するという臨床心理学の独自性・有効性を過小評価する可能性もある。そのため言葉を始めとしたディスコースへと「心理」や「問題」の場を移すアプローチは有益な理論的視座と言える（図参照）。しかしディスコース・アプローチは日本ではあまり知られておらず、諸外国においても実際のトランスクリプトを用いた分析は少ない。この点で本研究は、ディスコース分析の一つであるポジショニング理論を用いた実証的な臨床心理学研究としての意義もあると言える。

本研究の限界と今後の課題 研究参加者（インフォーマントおよびCI）の少なさと偏りによる一般化の問題、および個々の参加者の個別性の検討の弱さがある。本研究の知見は一つの可能性を示したものと言うべきである。今後は参加者のバリエーションおよび個々人のより詳細な分析を積み重ねながら、支配的ディスコース上のポジショニングや否定的影響への対処について、より精査していく必要がある。

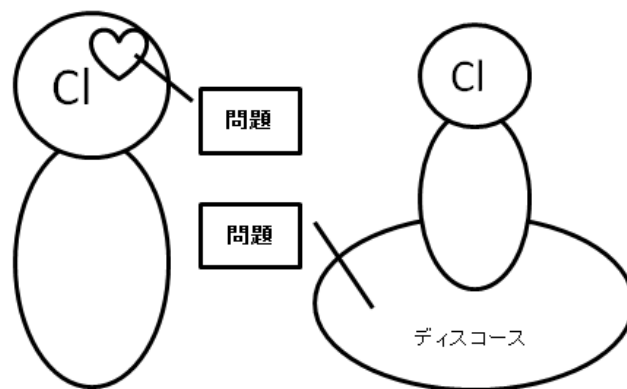


図 「問題」に対する一般的な臨床心理学の考え方(左)とディスコース・アプローチの考え方(右)